

# 愛の医学

木崎 国嘉

「天に在っては比翼の鳥、地に在っては連理の枝」とか、「雄カマキリの滅身の献愛」とか、「焼野の雉ききす、夜の鶴」などのほか、「ファーブルの昆虫記」、「シートンの動物記」をはじめ、いろいろの生物の愛の物語りが数多く語り伝えられている。

母性愛、夫婦愛などがあらゆる生物を貫いて尊い生のシンボルとして、偽人化されて賞讃され、その例はとうてい枚挙のいとまもないほどである。

しかしこれを人間の感情移入による偽人化を除外して、よくしらべてみると、それはまったくはかないほどの盲目的、自動的な本能的な生理に支配されているものであって、果してそんなものが愛といえるかどうかもうたがわしいものである。

例えば川から深い南太平洋の海底へと、遠い旅路の苦難をおかして産卵に急ぐウナギの母は、実は一定量のホルモンに支配され、故里恋し、妻恋しと川を遡るサケのオスは嗅覚の刺激による本能的な行動にしかすぎない。

人間の脳に比較して考えると、昆虫などは脳幹の部分だけしか発達していないが、これだけでも充分複雑な、人間が偽人化して考えると、献身的な愛情のシンボルのような行動をとり得ることがわかるのである。

たとえば人間がみても、理想的な社会の模範とも考えられるミツバチの愛に満ちたような社会の本当のしくみはどうだろう。

近年「不老長寿、スタミナの素」としてセンセーションをおこしているものにロイヤル・ゼリーがある。日本語では王乳といわれ、フランスではゼレ・ロワイヤル、ドイツではケーニギンネン・フットザフト、イタリアではゼラティナ・レアレといい女王バチの食物という。

ビーミルク（蜂乳）というのはこれとは別で、ミツバチの働きバチ、雄バチの幼虫の食べる乳のことをいう。

紀元前四二一年、ギリシャのアリストテレスは既に気づいていたが、一七世紀、オランダのスワンカルダムがロイヤルゼリーの存在を認め、一八世紀にスイス生れのミツバチ学者フランソワ・ユベールがさかんにゼレ・ロワイヤルという言葉を用いた。

それが今のようなブームをおこしたことのおこりは一九五〇年ごろからローマ法王のピオ二世が健康がすぐれず、危篤になった時に、主侍医のガレアジ・リシ博士がロイヤル・ゼリーを用いたところ奇跡的な効果があった事を一九五五年四月、ローマの国際医学大会で発表した。

その事を翌年、西ドイツのバーデン・バーデンにおける国際生物遺伝学会議で、フランスのクロード・エル教授が発表した。エル教授によると、

「実験の結果、この強力な栄養剤は人体の成長を助け、人体内化学過程に好影響を及ぼし、強い殺菌力をもつもので、人体の健康を増進し、人間の寿命を延ばす力をもつ、この薬は完全とはいわれないまでも、若さを永久に保ちたいという人々の願望を実現するために役だつことになろう」というセンセーショナルのものである。

一九五八年、ローマでの第二回国際養蜂大会にピオ二世が出席してロイヤル・ゼリーの神秘を称賛した。

その頃ソ連でコーカサス等に住む一〇〇歳以上の老人たちの多くが養蜂家で、ハチミツやロイヤル・ゼリーを常用していることが発表されてこの物質の神秘を探索する科学がさまざまに発展することになった。それにともなって蜜バチの生態が判明することになったのである。

蜜バチの一社会には卵を産むメス、すなわち女王は一匹しかない。二匹いた場合は実力闘争で一方が殺されてしまい。女王になるべきサナギは全部働きバチが殺してしまう。

ハレムには数百匹のオスがいますが、いたずらに徒食するだけで何の仕事もしない。

春さきに新しく誕生した女王が空にとび立つとオスたちはこぞってその後を追う。空中でたった一匹だけが交尾の光栄に浴することになっている。女王としてもこれが生涯最初で最後の「ただ一回だけの招待」である。

生還したオスは秋になれば働きバチによって追放されてしまう運命がまっている。

交尾した後の女王は、オスから受けた精子を受精嚢に貯えてもっており、卵を産む時に、精子で受精させて産むことも、精子を加えないで産むことも随意である。

受精した卵からはメスができ、そのうちの選ばれたものだけがロイヤル・ゼリーで育てられ女王になり、他はビー・ミルクで育てられ、性的には中性の働きバチになる。受精しない卵からの、性細胞の染色体数がメスの半数という、父なし子がオスになる。

女王は普通の働きバチの寿命がせいぜい一カ月あまりであるのに比し、四～五年の長生きをし、成長力も一週間に五〇〇倍、体格も働き蜂の三倍というL・L型のキングサイズ、毎日体重の二倍もの三千個の産卵をするというスタミナをみせる。

働きバチは一生涯働きぬくハチで、育児、巣作り、食糧の採取、水の運搬、衛生管理、門番、自衛隊、清掃からエヤーコンディショニングまで全く模範的な忠実さで行う。

どうしてこのような統制のとれた生活が営まれるか。それは案外簡単な生理的現象によるのである。

女王は何万もの働きバチやオスに自分を女王と思わせるクイン物質という女性ホルモンを分泌して放散する。これが働きバチの卵巢の發育を抑え、自分の絶対的な地位を確保している。この物質は働きバチたちが非常に好む匂いと味をもっていて、好んで吸っているうちに女王への尊敬と忠誠の念をいだしめるのである。

その女王が幼虫のとき王台の中に注がれたロイヤル・ゼリーでできる。

同じ受精卵から発した幼虫を花粉とハチミツで育てると働きバチにしかならない。ハチミツも花粉もすぐれた栄養をもっているが、ロイヤル・ゼリーはこれに比べ想像もできない栄養分をもっていることになる。

なおロイヤル・ゼリーは、花ミツと花粉が、働きバチのからだの中で消化吸収されてできるのである。このことは花ミツや花粉と異なり、完全な代謝成分として若い働きバチの咽頭腺から分泌されたものである。

こうした事情からロイヤル・ゼリーは「自然の奇跡食品」「若さの生気の源」などのキャッチフレーズで騒がれることになったのである。

昆虫程度の下等動物でも、これほどの本能による行動がとれるのであるが、人間以外的高等動物、つまり鳥獣ともなると、脳の辺縁系や僅かばかりとはいえ新皮質もでき、人間が自分たちの心情から疑人化して見るとき、いろんな教訓のもとになるような愛の姿がみられるようになる。

視床下部や辺縁系は本能の座であり、自動的な欲求の中核で、その働きの根元は視床下部と、その下にぶら下っているホルモン臓器の総指揮

者の下垂体である。

この仕組みは理論的にはまったくコンピューターと同じであって、ある種のホルモンの分泌が過剰になると、下垂体から、その分泌を抑制するホルモンが出され、分泌が少なすぎる場合には、分七を刺激するホルモンを出すようなフィードバック（帰還）の現象がある。

視床下部は下垂体と近く、連絡があり、その働きに対して敏感に反応し、その興奮が辺縁系に投影され、本能的な行動がひきおこされる。

人間以外の（高等動物といえども）動物の愛の医学は要するに視床下部と辺縁系が、あれこれのホルモンによって操作されているというのが本当の姿である。

こうして、その動物は、ある因子に対してとくに敏感になって、それに関心をもたざるを得なくなって一定のきまった行動を自動的におこなうのがオスとメスの愛なのである。

たとえばオスの蛾や魚はメスの発するにおいて敏感になって、そのにおいのあるところにひかれて飛び寄り、泳ぎ寄る。従ってその場所にメスがいないでも、そのにおいがあればそれに率引されるし、メスがいても、そのにおいを遮断しておけば見向きもしない。

ヒナを育てているメンドリはヒナのなき声にだけ敏感になっていて、もしヒナを防音のガラス器に入れておけばまったく母ドリは母性愛を示さない。

愉快なことには人間にずっと近い哺乳動物だってこのパターンは変わらない。

例えばウマには性ホルモンの血液中の一定水準以上になった場合の繁殖期があり、オスウマはこの繁殖期の期間（三月―七月）はセックス可能である。一方ウマの場合の性の主導権をもつメスウマのほうは、その繁殖期中に二三日を周期とする三〜四日ほどの発情期の時しかオスウマにセックスを許さない。

この発情期のメスのニオイがオスウマをハッスルさせるのである。

それをまた人間に利用されるのがウマの人工授精である。

ウマは嗅脳の部分が発達しているが、視覚のほうはまるで駄目である。ひどい近眼、乱視、色盲、鳥目、その上両眼の協力が悪いため物を立体視したり、遠近を識別することがむづかしい。

それを利用してベニヤ板やブリキ製の鞍馬様の偽牝馬というセックス・マシーンをつくり、せいぜい馬の毛皮をかけておき、発情期のメスの生殖器のにおいを塗るか、尿をぶっかけておく。

このにおいにハッスルしたオスは素晴らしき恋馬と乗りかかると、中にひそんだ人間のメスのマッサージであえなく射精、それを五〇回分ほどに分割、零下一九六度に冷凍保存して、必要時に生理的食塩水にとかし、体温にあため、発情期のメスの子宮に注入して妊娠させるというまったくあじきない方法がとられ、それでウマは充分満足なのである。

もっとも人間も青年期になると、異性の声や、においや、容姿に敏感になる。この基本は人間以外の動物たちと同じように、ホルモンの作用による。ということは人間にもオスとメスの段階のセックスや愛も存在する。

しかし人間はそれを基盤により高次な愛が、男性と女性としての、夫や妻としての人間の愛情があるわけである。

オスとメスの段階の生理的な本能的の愛、視床下部と辺縁系だけに発する愛には次のような特性がある。

① それはまったくの自己愛、エゴイズムに過ぎない。他のことは考慮に入れていないのである。その充足が遮げられた時には、怒りの中枢が刺激され、排他的になり、斗争を挑む。

② しかしその怒りは強烈ではあるが、あくまでも異性を獲得する手段のためのもので、相手が手ごわい場合には、すぐに怒りの中枢から恐怖の中枢にスイッチされ、人間のように手段が目的になって最後まで争うようなことはしない。あくまでも須位決定のためのトーナメントにすぎない。

③ それは盲目的で、知覚のレパートリーはまったく狭い。ウマはニオイにだけ、メンドリはヒナの声にだけというわけである。人間の場合の「恋は盲目」などというのにも少し似通っていて面白い。もちろんその機構はまったく違うのである。

④ それは変転し易く、一時的である。人間の教訓に用いられる鳥獣の夫婦愛も親子愛もはかなく消滅する。あるホルモンのレベルが一定以下になればもう見向きもしない。この点未練たらしい人間は優れているのか劣っているのか。

⑤ それは限定された部分的なもので、またまったく表面的なものにすぎない。

こうした事についてはディズニーの作品などは数多くの人間以外の動物の愛を考える示唆を与えてくれる。

次に人間的な、本当の人間の愛とは何だろう。

人間にとって愛は人間以外の動物とはだいぶ様相がちがうので、それを論じる前に、まず人間とは何かについて考えなければならない。人間は他の動物と比べ、またコンピューターと比べてどんな特徴があるか。

スウェーデンの博物学者リネー（一般にリンネとよばれている）は一七三〇年に二重命名法によって人間をホモ・サピエンス（智慧のあるサル）と学名をつけ、現在の人類はすべてこれに属している。

ノーベル賞受賞者のアレキシス・カレルは「人間この未知なるもの」を書き、人間の構造、機能に驚異の目をみはっている。

いっぽう、ノーベル賞受賞のフランスの医学者シャルル・リシエは人間のあまりにも愚行にあきらはてて「人間―愚かなもの」という本を書き、ホモ・スツルツスとなづけ、哲学者のガブリエル・マルセルは「人間―それ自らに背くもの」とした。そのほかにアリストテレスは「社会的動物」、ソクラテスは「理性をもった動物」、パスカルは「考える葦」、フランクリンは「道具を使う動物」、カッシーラー（ドイツ哲学者）は「シンボル（言葉）をあやつる動物」、ホイジンガ（オランダの史学者）はホモ・ルーデンス（遊ぶ人間）と変った命名をし、ノーベル賞学者のセント・ジェルジュは「狂ったサル」と愛想をつかした呼び方をし、そのほかホモ・ビオロギクス（生物学的人間）だとか、ホモ・エロティクス（性的人間）などとしての見方もある。

人間をほかの哺乳動物と決定的に区別しているものはその大脳の新皮質という部分の発達であって、これによって人間は眼前の事物に埋もれて、反射的に反応するだけでなく、過去、現在、未来や、置かれている環境に応じ、自分の利害得失という尺度に照らしあわせて行動する点にある。

一九世紀最大の歴史家ランケによると

「人間とはこの上もなく純真だが、この上もなく狡智にたけ、この上もなくケチだが、この上もなくむだづかいで、この上もなく自己犠牲的で、この上もなくエゴイストであるという両側面を兼ね具えている。だから人間の歴史は面白いのだ」と。

こうなってくると人間とは「人間―この複雑怪奇で個人差の甚だしいもの」といえよう。

人間の脳については「生命の導き方に関する考察」の中でアレキシス・カレルは述べている。

「たしかに人間の脳は、シデラル（天体）のめまいするほどの大きさに比較すれば無限に小さい。あるいはわれわれの住む地球に比べても。けれども脳は比較にならない品質である。一二〇億以上の神経細胞。その細胞をつらねるトリリオン（数兆）の微細な小繊維によって調和のとれた連合は、宇宙の中に同等のものを捜し得ない。そして、この生命のある微小な量からパンセ（思想）の無尽の力が抜けてでる——」と。

人間のすぐれた精神活動は主に大脳皮質で行われ、ここには百四〇億の細胞があり、しかもこの細胞は生れてから一度も分裂しない。数も大きさも変らないのに、生れたての赤ん坊の脳（四〇〇グラム）と成人の脳（男一四〇〇グラム、女一二五〇グラム）の大きさのちがうのは脳の突起の数がちがうからで、その突起が数十本も百本もあり、伸びて互に複雑なからみ合いをつくるからである。

スイスの動物学者アドルフ・ポルトマンによると

「人間の赤ちゃんが生れたときに、もしチンパンジーのように動き回ったり、えさを拾うようになるためには二一カ月の間胎内にいなければならない」と。

このように人間は脳に関しては「月足らず」で生れるが、生後突起のからみ合いのでき方がちがう。〇歳から三歳の間はとくに発達が著しく、三歳から二〇歳までの間のと匹敵するといわれる。

大脳の皮質は大きく分けて「古い皮質」と「新しい皮質」とからなる。

古い皮質の部分は下等動物にも発達していて、人間でも三歳までにかみ合いの組み立てができ上る部分で、におい、痛み、内臓覚などの原始感覚を感じ、食欲、性欲、集団欲などの本能と怒り恐れなどの情動の心をつくる。

本能の欲求が満たされると快感を覚え、満たされないと不快を感じ、さらには怒りを発する。

個体と種族を保持する生命を円滑に維持するためには自律神経とホルモンの分泌を調節しなければならぬ。こうした働きは視床下部を仲立ちにして古い皮質で管理されている。要するに古い皮質の働きは生存競争に生きぬく行動にかり立てる役をしているのである。

この中で注目されるべき集団欲による集団形成で、その本能の満たされない孤独の状態に置かれるとたちまち心身の異常が起る。

最近「古い皮質」の研究が進み、「古い皮質」が脳幹に働きかけて、自律神経やホルモンの分泌に対して強い影響を及ぼしていることがわかった。もし「古い皮質」の働きが高ぶったり乱れたりすると、脳幹に影響して内臓の働きを乱す。これが精神と肉体との接点のしくみである。

三歳ぐらいいまでは環境の示すパターン通りにこの部分のからみ合いが組立てられる。

新しい皮質は人間だけにとくに著しく発達している部分で、前半分と後半分に分けられる。目や耳から送り込まれた情報は後半分に到達して見えた、聞えたりする。

後半分で受け入れた情報をもとにして、言葉や表情や動作によって、自分の考えを行動として表現する働きは前半分、つまり前頭葉で行うのである。

この前頭葉の働きは人間だけがとくに優れているもので、とくに創造する働きは人間だけが行う。喜び、悲しみ、ねたみ、そねみなどの「情緒」は新皮質の働きで（怒りなどは「情動」とよばれ古い皮質の働き）、ある目的をもって行動した時にうまく行けば喜びになり、うまく行かねば悲しみになる。動物でも情動はあるが、情緒は人間だけにある。このところが人間と動物のもっとも大きなちがいである。人間の場合には動物としての人間の心と生命は古皮質に支配されているが、高等な精神機能をもつ新皮質の監督をうけて共存しているのがソクラテスの所謂「理性をもった生物」なのである。

集団生活の中で勝手に「古い皮質」をむきだしにすると混乱するので、人間は「新しい皮質」の理性や知性によって「古い皮質」を適切にコントロール（制圧）している。ところがこの制圧があまりつよいと「古い皮質」の働きを異常にする。欲求不満（フラストレーション）はその一つの状態である。

こうした新しい皮質の脳細胞のからみ合いは三歳ぐらいからつくられ、ただ示されたままだけでなく自分で気に入ったものを取り入れて組立てて行く。六歳ぐらいで殆どでき上り、二〇歳位で完成してしまうのである。

このように人間の男性、女性（オス、メスではない）では辺縁系といわれる古い皮質のほかに巨大な新皮質とが有機的な統一体を形成しているため、基盤的には高等動物と似ているように見えても、実は全く別個の質的に全く異ったものである。

たとえば人間は四季、昼夜をとわず、一年中性欲発動の可能性をもち、性を生殖の手段としてでなく、目的そのものにしたたり、性と愛とを別個に考えることもある。前頭連合野の働きによる高次の愛情の時に、性欲は最少限になっている。

そういえば愛やエロスということ自体、人間独特な現象で、動物はプラトニック・ラブや変態性欲といわれるウラニズム（俗にホモといわれ

る)やレズビアンズムもしない。

人間の愛は相手があって、そして伝統や信条、その人の経歴によってもちがひ、著しい個人差もある。とくに日本では愛はすなわち性愛、みだらという観念が支配し、その根源が貝原益軒の『養生訓』に発している。

貝原益軒の「養生訓」というとたいの人は読みもしないでセックスの本だと思っている。それは「慎色慾」の項があるためで、またこの項がこの書の主峰でもある。「養生訓」は益軒が八三歳の時に書いたもので、彼は一七二四年、八四歳で死んでいる。

存命中は儒者で、博物学者、庶民教育家、著述家で、九八部二四七巻もの著書がある。

性を汚わしものとしていた当時、彼なりに真面目に性をとり上げたことは立派だが、客観性を欠き、男女「相對」のはずのものを男性側の都合で書き、甚だしい個人差があり、秘密の多いものを一律に、書いた時の自分の主観や好みが先入主になっている。

有名な「接して泄さず」にしても、排泄物にしかすぎない精液を貴重なものと考え、使えばなくなるといふ貯金式思想と、泄さなかったら身体の精気になると、排泄物がホルモンにかわって血液によって循環すると考えたわけで、それすらも本当は唐の孫思邈からの借りものの迷信である。

「養生訓」の中で一般によく知られているのはセックス回数と年齢の関係である。

「男女交接の期は、孫思邈が千金方に曰く、人、生二十の者は四日に一たび泄す。三十の者は八日に一たび泄す。四十の者は十六日に一たび泄す。五十の者は二十日に一たび泄す。六十者は精をとじてもらさず……」

現代人からみれば何たる消極さ、だいいち泄らしてもらおう側がヒステリーになってしまう。

人生五十年が理想の時代だったことも考慮にいれて好意的にその意味をとるべきである。

ついでによく引合に出される「キンゼー報告」(これももうかなり古い)ではアメリカの夫婦の場合二〇歳まで二・六回、四〇歳まで一・六回、六〇歳まで〇・六回が一週間の平均、連日行うのは二五歳で一四%、三五歳で五%、四五歳で三%、五五歳で〇%になっている。しかしヘンリー・ミラーとホキ徳田、オナシスとジャッキーのような年齢差もあり、個人的に好みもあり、量を誇るなり、質で行くなり自由でいいわけである。

マスコミであまり異例なものばかりをとり上げるため、まともな男性がインポ扱いにされたり、「弱いあなたなんかキライ」となる。

セックス回数は社会によって昔から問題にされ、古代ユダヤでは学生たちは昼間に学問がよくできるために、夜は毎夜行えと忠告され、中世では逆に学問の妨げになるからタブーといわれた。

ムハメッドの時代には週一回、古代ローマのゼノビア妃は月一回に制限し、中世スペインのアラゴン女王は一日六回が適当だと法律をつくったし、日本の馬鹿殿様は「下民どもにはぜいたくじゃ禁じてしまえ」といった落語もある。

あくまでも当事者の好みにまかせ、疲労がのこって生活がみだれない限り、他人がとやかく言うべきすじあいのものではない。

益軒は「氣力すぐれて盛なる人」は性欲旺盛で能力も強いと考えているが、これも素人が信じている根拠なしの独断である。

性欲は精液の量で決められるものではなく、精液は外分泌液で、性ホルモンは内分泌液である。

性欲（リビド）は体力や性能力とは別種なもので、人間の性欲は脳の新皮質にある性欲中枢が主役である。精巣や卵巣の機能が衰えても性欲はなくならないし、機能旺盛でも全く不能になる事もある。

「性のよろこび」を分析したマデリン・グレイ女史によると、「人間の性欲はその四〇％が快楽の習慣から、四〇％が相互の愛情によって、そして二〇％が性ホルモンによる」となっている。

女性にとって閉経は性の停年でもなければ、スクラップになったのでもない。子どもを産むことから開放されただけで、性欲はますます盛んになっても不思議でない。男女とも要は自信をもってバターボックスに立つことである。

「養生訓」はベカラス集であるが、その「房室の戒め多し」が白眉である。

「……殊に天変の時をおそれ、いましむべし。日蝕、月蝕、雷電、大風、大雨、大暑、大寒、虹蜺、地震、此時房事をいましむべし。春月、雷初て声を発する時、夫婦の事をいむ——」

まあストレス作因の多い時はセックスどころじゃないと解釈しておこう。

「わが父祖の神主の前、聖賢の像の前、是皆おそるべし——」  
今ではお笑い草で、却ってハッスルしかねない。

——病中、病後、元氣いまだ本腹せざる時、殊に傷寒、時疫、瘧疾おの後、腫物、癰疽ようそいまだいえざる時、氣虛、勞損の後、飢渴の時、大醉、大飽の時、身勞働し、遠路行歩につかれたる時、忿・悲、うれひ、驚きたる時、交接をいむ——”

あたりまえで、狂人じゃあるまいし、誰がそんな時に性欲をもよおすものか。

——又女子の経水、いまだ尽きざる時、皆交合を禁ず、……生るる子も亦、形も心も正しからず、或はかたは（片輪）となる。禍ありて福なし。古人は胎教とて、婦人懐妊の時より慎める法あり。房室の戒は胎教の前にあり。——”

健康な女性のしるしのメンスを不浄ときめたことの名残りで、今では妊娠の心配がないとわざわざその時期を選ぶものもいるくらい。まして生るる子……以下は根拠のないことである。

それにしてもセックスに強くなりたいたいと願う人は多く、奇怪千万なものでも効くとなれば何でも手に入れようとする。

“高価だから効く” “偉い人がいうのだから効く” というわけで、心理的効果が関の山である。むしろなぜ弱くなったかの原因を見出すことで、セックスは男性と女性が、合意的に、お互いに積極的な欲望をもって行うことである。決して性器どうしのドッキングではない。

またセックスそのものが第一義のものであるべきで、ほかの何物にも換算されるべきでない。金銭とか地位、利権をはじめ、極端にいえば子どもをつくらうという目的でセックスするのは動物的である。

さらにセックスによって第三者をふくめ、お互いが傷かかないことが大切である。そうするとウワキ、ヨロメキもタブーということに一応はなる。

自分の積極的な自由意志によらないセックスも本当は正しいものでない。外国人が聞いて驚くのは “あなたに捧げます” とか “上げてよかった”、 “くれてやった” というような歌の文句。結構楽しんでおきながら “汚された” “恥かしめをうけた” というような考え方である。

また感情や情緒ぬきのノルマ制セックスなどやらないほうがましである。アクビをかみ殺しながら、テレビのクイズ番組に氣をとられ、今その時間だというだけのギリマンなど。まったく動物の種付け程度の次元の低いものである。

フロイドはリビドという言葉を心理学の用語にしたが、このラテン語にはいろいろの意味があつて、性本能とか性欲という意味のほかに、熱望、欲望、情欲という意味もあり、むしろこうした言葉のほうが自然の意味を伝えるが、エロとか愛とかかのように外国語を無理に日本語に訳し

た場合にまったく異ったニュアンスをもってしてしまうのは日本の古来からの伝統にもとづくのである。

日本の識者はセックス・ブームも、ポルノ（ギリシャ語のポルネは娼婦、グラフィンは描く、に語義をもつポルノ・グラフィ）もエロであると評する。そしてけがらわしいもの、みだらなものと軽蔑的な目でみる。

ギリシャの恋愛、むしろ純愛ともいべき愛神エロスから来た言葉が、識者に下品な響きを伝えるのも、古くから用いられる「色」と語呂が似ているため、色事、色ざなどと連想して、リビドー・タブーの物指しにかけて、悪い、いやしいものにしてしまうのである。

本編の主題である愛についても類似のことがいえる。

明治時代の文化人はほとんどがいわゆる和魂漢（洋）才の人で、古い伝統の儒教やさむらいの考え方から抜けきれないのが西洋のラブ、リーベ、アモールなどの言葉に「愛」という字を無理に当てたのである。むしろこいとかいとしみとかの字のほうがまだしも適切であったかも知れないので、恋愛などの字も追加して細工してみたのかも知れない。

しかし、しょせん日本人の心情にとけ込んでいた「愛」は、漢字の愛で、中国の伝統からきたもので、ながい間の男尊女卑の風習が基調になり、卑しい女を「愛玩」「愛籠」「愛歓」「愛撫」といった意味でしかなく、優越した身分や地位の高い男性が女性の価値を認めて「愛」を恵んでやるほどの意味しかなく、その価値も容姿や、肉体的魅力に対してでしか感じなかったのである。その中国の伝統が、和魂漢才の明治の知識人の中に存続していたのである。

愛の医学という主題の下では、そうした人間の脳の新皮質の作用というものを充分に考慮に入れながら、本当の意味の人間的な愛の様相をみなければならぬ。

動物の場合には性欲とか愛（という言葉が使えるかどうか疑問だが）は種属保存（生殖）の目的のためにだけ用いられているが、オスとメスでない男性と女性という人間の場合には、子孫をのこすという意義からはなれて、性欲や愛それ自身が無目的な目的になる。

そしてその愛が脳の新皮質、特に前頭連合野という部分でいとなまれていて、この部分の完成は人間の一生をかけて学習してもしつくせない大きな問題である事を決論として述べておこう。